

覚一本『平家物語』名のり考

——類型とその意義——

城 阪 早 紀

はじめに

同じ合戦であっても諸本がそれぞれに描く合戦像は異なり、その描き方を検討することによって人物造型や物語の構想をも明らかにすることができると考えられる。^① したがって、『保元の乱』を対象にして論じたことがある。^② これを踏まえて覚一本『平家物語』の合戦描写について考えたい。

後に確認するように、覚一本の合戦描写には類型表現が多く用いられており、装束描写や名のりはその好例といえる。

従来こうした類型表現は、語りの中で洗練され加筆されたものと考えられてきた。はやく渥美かをる氏は巻四

「橋合戦」をとりあげ、百二十句本では一部が欠けている頼政と忠綱の装束描写が覚一本では増補によって整えられていること、百二十句本にはみられない明秀の戦闘の「くもで、かくなは、十文字、とんばうかへり、水くるま、八方すかさずきつたりけり」といった「慣用句」が覚一本にはみえることを指摘した。^③ 渥美氏の指摘を受け加美宏氏は、明秀の合戦の「くもで、かくなは」といった覚一本の「定型的な一節」が延慶本・長門本・源平盛衰記といった読み本系諸本にはみられないことから、「『平曲』の『語り』の中で洗練され、完成されているもの」と理解した。^④

その一方で本文形成に書承を重視する考えが盛んになる。たとえば大井善壽氏は、装束描写や名のりを示す詞

章は「文章表現の型であって、口承文芸における決まり文句とは異質のもの⁽⁵⁾」であるという考えのもと『平家物語』は書承文学である。口誦で伝達・享受されることもあった⁽⁶⁾と結論づけた。千明守氏もまた、『語り本だから、その詞章変化は全的に〈語り〉によってもたらされたはずだ』といった、無自覚に本文変化と〈語り〉とを結び付けるような方法はもはや意味を失った⁽⁷⁾と述べる。

『平家物語』のとりわけ覚一本に顕著にみられる類型表現は、「語り」ではなく「書承」によるものという見方が強まるなか、小林美和氏は再び合戦場面の類型表現をとりあげ、次のように述べる。

平家物語は、本来一つのテキストに淵源を發しながら多様な展開・変容のあとをたどったものと思われる。それらの軌跡は、今日、テキストの書承上の関係として捕捉できる要素も少なくない。たとえば、延慶本と語り本の関係にしてもそうである。しかしながら、この両者の間には、やはりそれだけでは捉えきれない、一つの飛躍^(傍点マ)とでもいうべきものが存在するのも事実である。その意味で、「音声によるパフォーマンス（上演）としての語り」⁽⁹⁾が、そこに果

たした役割の追究は、やはり、重要な課題と思われる。その意味で、右に垣間見た類型句の反復の問題は、これらを解く鍵の一翼を担うものといってもよいであろう⁽¹⁰⁾。

こうした「飛躍」が具体的に何であり、それは何によってもたらされたのか。のみならず、「語り本」とは何か、覚一本とはどのような本文なのか、といった問いに答えるべく、新たな観点からの考察が進められているのが現状であろう⁽¹¹⁾。

本稿では『平家物語』本文生成の問題をひとまずおき、類型表現が物語の中持つ意義について延慶本と屋代本との比較から考え、覚一本が確立した合戦の叙述法を明らかにしたい。

装束描写の類型については繰り返し論じられており、特に覚一本についていえば島田康行氏の調査⁽¹⁵⁾があり、また服部幸造氏の論考も重要である。名のりに関しても、坂口玄章氏⁽¹⁷⁾、加美宏氏⁽¹⁸⁾、梶原正昭氏⁽¹⁹⁾による論考があり、「ほぼ定型的な叙述方式が成立している」ことが指摘されている⁽²⁰⁾。

しかしながら、改めて名のりがどのような行為であるのかを考えると、その定義が定まっているとは言いがた

い。たとえば前期・後期軍記の名のりを概観した西本祐子氏の調査と覚一本の名のり分類を試みた武田昌憲氏の論⁽²²⁾がある。管見の限り覚一本の名のりの数を示したのは両氏のみだが、その数は西本氏二七例、武田氏二六例と一致しない。このことは、名のりの定義が論者によって異なっていることを示唆しよう。

そこで別稿において、動詞「なめる(名乗)」⁽²³⁾「なりのまうす(名乗申)」を伴う発言が、覚一本の合戦場面に二例あることを確かめた。まずはこの二二例を手掛かりに、覚一本の名のりの定義を考えたい。

また従来は、覚一本を中心にした検討であったため、名のりの定型的な叙述が『平家物語』の特徴であるのか覚一本の特徴であるのかが明らかにされているとはいえない。よって覚一本の名のりが類型表現によつて成り立っていることを延慶本や屋代本と比較からいま一度確かめたい。

一、覚一本の名のり

覚一本の名のりは、いくつかのパターンに分類することができ。武田昌憲氏は、覚一本の戦場の名のり二六例を次のように分類した。

1 「貴種型」：「先祖の輝かしい武功」など「他氏に対する優位性を誇示するもの」
2 「武勇型」：「己れ自身の武功又は現在の自分の地位・職について述べるもの」
3 「先陣型」：「敵陣への一番乗りを成し遂げた者が」「功績を誇示する為のもの」

4 「勝ち名のり型」：「名だたる敵の武将の首を見事に討ち取った時に名のるもの」

5 「問われ型」：「個人戦闘の直前」・「組み討ちの真最中に」「尋ねられた時に名のる型」

6 「その他」：「名寄せ型」・「代理型」・「簡略型」⁽²⁴⁾
この六分類のうち、4 「勝ち名のり型」と5 「問われ型」は的確な分類だが、他の分類には疑問が残ると考える。

たとえば3 「先陣型」は、名のりの発言部に「くの先陣ぞや」の表現がある例のみを先陣型とする。だが実際には、「くの先陣ぞや」の表現がなくとも前後の文脈から先陣を遂げていると判断できる例も少なからずある。例をあげると、橋合戦で先陣を遂げた忠綱(巻四)、一ノ谷の先陣を主張する熊谷直実や平山季重(巻九)、屋島合戦で先陣を遂げた源義経(巻十二)の名のりがある。

これらはそれぞれ武勇型・貴種型・その他に分類されている。

つまり、貴種型・武勇型のように名のる人物の属性による分類と、先陣型・勝ち名のり型・問われ型のように名のりを行う状況による分類との、二つの基準が併存している。このために齟齬が生じたり複数の型にまたがったりする例が存在する点に、なお考察の余地があろう。

そこで本稿では、覚一本の名のり二二例を、名のりを行う状況の違いによって次の四つに分類する。

(1) 宣戦布告の名のり (六例)

…敵に対して戦いを挑む名のり。これを契機として名のった人物の戦闘を描かれる。

(2) 一騎討ちの名のり (五例)

…一騎打ちの場面で、敵からの要求に応じて行う名のり。

(3) 勝名のり (三例)

…敵を討ち取ったことを主張する名のり。
これによって戦闘が収束する。

(4) 先陣の名のり (八例)

…先陣を遂げたことを主張する名のり。これによって合戦譚の火蓋がきられる。

(1) 宣戦布告の名のり

宣戦布告の名のりは、敵に対して戦いを挑むことを目的として行い、それを契機として名のりをあげた人物の戦闘が描かれる名のりである。その戦闘は対集団である。

その典型として明秀の例がある。明秀の場合、A装束描写の後、B名のりを契機としてC明秀の戦闘が始まる。引用に際して、発話部に対応する動詞に傍線を付した。

明秀の場合は、「名のり」である。覚一本の表現の特徴の一つとして、「大音声(を)あげて」という句が、名のりの発言部を導くキーワードとして繰り返し用いられる点があげられる。この句に二重傍線を付した。戦闘に用いられる類型表現のうち、注目すべきものには点線を付した。

1 (明秀) A 堂衆のなかに、つ、井の浄妙明秀は、かちんの直垂に黒皮威の鎧きて、五枚甲の緒をしめ、黒漆(の)太刀をはき、廿四さいたるくろぼろ(の)矢おひ、ぬりこめどうの弓に、このむ白柄の大長刀とりそへて、橋のうへにぞす、んだる。B 大音声をあげて名のりけるは、「日ごろはをとにもき、つらん、いまは目にもみ給へ。三井寺にはそのかくれなし。堂衆のなかにつ、井の浄妙明秀といふ一人当千

の兵物ぞや。われとおもわん人々はよりあへや。げんざんせん」とて、廿四さいたる矢をさしつめひきつめさんくにある。Cやにはに十二人あころして、十一人に手おほせたれば、ゑびらに一ぞのこつたる。弓をばからとなげすて、ゑびらもいてすててンげり。つらぬきぬいではだしになり、橋のゆきげたをさらくさらとはしりわたる。人はおそれてわたらねども、浄妙房が心地には、一条二条の大路とこそふるまうたれ。長刀でむかふかたき五人なぎふせ、六人にあたるかたきにあふて、長刀なかよりうちをッすててンげり。その後太刀をぬいてた、かふにかたきは大勢なり、くもで・かくなは・十文字、とンばうかへり・水車、八方すかさずきツたりけり。やにはに八人きりふせ、九人にあたるかたきが甲の鉢にあまりにつよう打あてて、めぬきのもとよりちやうどをれ、くツとぬけて、河へぎンぶと入にけり。たのむところは腰刀、ひとへに死なんとぞくるいける。

(巻四「橋合戦」三一〇―一頁)

A装束描写は、直垂・鎧・甲を記した後、太刀・矢・弓を順に描く。装束描写を型通りに記すことで、大勢の中から明秀一人が焦点化される。

続くB名のりの発言部をみると、最初に「日ごろはをとにもき、つらん、いまは目にもみ給へ」と大勢の敵に向かつて呼びかけた後、「三井寺にはそのかくれなし。堂衆のなかにつ、井の浄妙明秀といふ一人当千の兵物ぞや」と自身の名を告げる。そして「われとおもわん人々はよりあへや。げんざんせん」と相手を挑発するといった順序である。

この名のりを合図としてC明秀の戦闘が始まる。戦闘では、大勢の敵の中へ身を投じていく様が、弓・長刀・太刀・腰刀と武器の描き分けによって、あるいは薙ぎ払った敵の数の羅列によって克明に記される。

クライマックスである太刀での乱戦は、点線部の「くもで」「かくなは」「十文字」……と定型句の羅列で描かれる。これは、旧大系の注が指摘する通り「少数の者が大勢の中で奮戦する形容」²⁷である。数的不利な状況にありながらも一心不乱に戦い、敵の軍勢を突破していく様が、リズムのよい語の連続によって想起される。太刀が折れる様は「ちやうどをれ、くツとぬけて、河へぎンぶと入にけり」と擬音語をたたみかけることで表される。太刀筋の激しさと臨場感が伝わる描写である。

このように装束描写、名のり、戦闘を順に描く方法は、

小林美和氏が「いくさ語りの常套⁽²⁸⁾」と指摘したように、
覚一本のみならず『平家物語』諸本に広く認められる叙
述の手順である。

名のつた後に大勢の敵の中へ駆け入るのは、明秀ばかりではない。残る五人の場合も同様である。引用の際、
名のりの直前に装束描写が記される場合は、〈装束描写〉
と略した。

2 (義仲) A (装束描写) B あぶみふんばりたちあがり、大音声をあげて名のりけるは、「昔はき、けん物を、木曾の冠者、今はみるらん、左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一条次郎とこそきけたがいによい敵ぞ。義仲うって兵衛佐に見せよや」とて、おめいてかく。…C 木曾三百余騎、六千余騎が中をたてさま・よこさま・蜘蛛・十文字にかけかわッて、うしろへつツといでたれば、五十騎ばかりになりにけり。

(巻九「木曾最期」一七八頁)

3 (仲頼) B 大音声あげてなのりけるは、「敦実親王より九代の後胤、信濃守仲重が次男、信濃次郎藏人仲頼、生年廿七歳。我とおもはむ人々はよりあへや、見参せん」とて、C 堅様・横様・くも手・十文字に懸わり懸まはり戦ひけるが、敵あまた打とつて、つ

ゐにうち死してンげり。

(巻八「法住寺合戦」一五八頁)

4 (景時) B 大音声をあげてなのりけるは、「昔八幡殿、後三年の御た、かいに、出羽国千福金沢の城を攻させ給ひける時、生年十六歳でまッさきかけ、弓手の眼を甲の鉢付の板にみつけれながら、当の矢をみて其敵をゐおとし、後代に名をあげたりし鎌倉権五郎景正が末葉、梶原平三景時、一人当千の兵ぞや。我とおもはん人々は、景時うって見参にいれよや」とて、おめいてかく。…C 梶原まづわが身のうへをばしらずして、「源太はいづくにあるやらん」とて、数万騎の大勢のなかを、たてさま・よこさま・蜘蛛・十文字にかけわりかけまはりたづぬるほどに、

(巻九「二度之懸」二〇八頁)

この三人の名のりも、明秀と同様に「大音声(を)」あけて名のりけるは」の句がある。発言部も、まず敵に対して呼びかけ、自身の名を告げた後、戦いを挑む形式で、順序が入れ替わることはない。その直後には戦闘が名のつた人物の行動によって描かれ、そこには点線部の「たてさま」「よこさま」「蜘蛛」「十文字」の定型句が用いられる。

明秀が橋の上をかちだちで進む戦闘であつたのに対し、義仲・仲頼・景時は騎馬戦である。合戦の状況が異なるにもかかわらず、同じ「くもで」「十文字」の定型句を組み合わせた類型表現を使う点は、注目に値する。

兼平と光弘も同様に、名のつた後に戦闘が続く。

5 (兼平) B 今井四郎只一騎、五十騎ばかりが中へかけ入、あぶみふんばりたちあがり、大音声あげてなのりけるは、「日來は音にもき、つらん、今は目にも見給へ、木曾殿の御めの子、今井四郎兼平、生年卅三にまかりなる。さるものありとは鎌倉殿までもしろしめされたるらんぞ。兼平うって見参にいれよ」とて、C みのこしたる八すぢの矢を、さしつめ引つめさんさんにある。死生はしらず、やにわにかたき八騎ゐおとす。其後打物ぬいてあれにはせあひ、これに馳あひ、きッてまはるに、面をあはするものぞなき。分どりあまたしたりけり。

(巻九「木曾最期」一八〇―一頁)

6 (光広) B わらはれてなのりけるは、「かう申は信濃国諏訪上宮の住人、茅野大夫光家が子に、茅野太郎光広、必一条次郎殿の御手をたづぬるにはあらず。おと、の七郎がまへで打死して、子共にたしかに

きかせんと思ため也。敵をばきらふまじ」とて、C あれに馳あひ是にはせあひ、敵三騎ゐおとし、四人にあたる敵にをしならべ、ひっくンでどうどおち、さしちがへてぞ死にける。

(巻九「樋口被討罰」一八三頁)

兼平は「五十騎ばかりが中へ」、光弘も「いくらも馳むかふたる敵の中へ」駆け入って名のつており、大勢の軍勢に戦いを挑む例といえる。その戦闘には、明秀の戦闘にもみられた「さしつめ引つめさんさんにある」や、「あれにはせあひ、これに馳あひ」といった類型表現がみえる。

このように宣戦布告の名のりでは、名のりの直後に大勢の敵を相手にした乱戦が描かれる。

(2) 一騎討ちの名のり

一騎討ちの名のりは、五例ある。たとえば熊谷直実の例がある。

7 (直実) 「汝はたそ」ととひ給ふ。「物そのもので候はね共、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申。

(巻九「敦盛最期」二三〇頁)

直実は、敦盛の「汝はたそ」という問いかけに応じて

名を告げる。前述の宣戦布告の名のりは、「日来は音にもき、つらん」と名声を誇ったり「一人当千の兵ぞや」と武功を主張したりする名のりであったが、一騎討ちの名のりではそうした表現はみられない。住国と姓名を簡潔に告げるのみである。

直実の名のりは、邦綱や行綱の名のりと似ている。

・「何ものぞ」と御尋ありければ、「進士の雑色藤原邦綱」となのり申。
(巻六「祇園女御」四二〇頁)

・「何者ぞ」と御尋ありければ、「信濃国住人矢嶋の四郎行綱」となのり申。
(巻八「鼓判官」一五六頁)

これらは合戦場面ではない例で、主上や法皇に対して威儀を正して行われる名のりである。直実との共通点として、①相手からの要求を受けて②住国と姓名を簡潔に告げ③動詞「なのりまうす(名乗申)」を用いる点があげられる。この二例から直実の例も、名を問うた敦盛との身分差を意識した畏まった名のりといえる。

一騎討ちの名のりは、組み合う直前あるいは首を掻く直前に、接近した二人の間で行われる。したがって大勢の敵に聞こえるように名のりする必要はなく、「大音声(を)あげて」の句が付されることはない。

残る四例も、「なにものぞ」「いかなる人ぞ」「名のれ」

などと名のりを要求する表現があり、それに応じて簡潔な表現で名を明かす。

8 (行重)「わ君はなにものぞ、名のれきかう」
といひければ、「越中国の住人、入善小太郎行重、生年十八歳」となのる。
(巻七「篠原合戦」七八頁)

9 (重綱)「こ、にかくるはいかなる人ぞ。なのれや」
といひければ、「木曾殿の家の子に、長瀬判官代重綱」となのる。
(巻九「宇治川先陣」一七一頁)

10 (光盛)「かういふわどのはたぞ」。「信濃国の住人手塚太郎金刺光盛」とこそなのッたれ。
(巻七「実盛」七九頁)

11 (則綱)「…わ君はなにものぞ、なのれ、きかう」
といひければ、「武蔵国住人、猪俣小平六則綱」となのる。
(巻九「越中前司最期」二二四頁)

(3) 勝名のり

敵を討ち取ったときにあげる勝名のりは、三例が認められる。宣戦布告の名のりは戦闘の契機となる名のりであったが、勝名のりは戦闘を収束させるはたらきをする。たとえば則綱の名のりは、越中前司盛俊を討ち取ったことを主張するものである。

12 (則綱) 太刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、

大音声をあげて、「此日来鬼神と聞えつる平家の侍
越中前司盛俊をば、猪俣小平六則綱がうツたるぞ
や」となのッて、其日の高名の一の筆にぞ付(に)
ける。

(巻九「越中前司最期」二二五頁)

その表現は、名のりの直前に「太刀のさきにつらぬき、
たかくさしあげ、大音声をあげて」という句があり、
「越中前司盛俊をば」と討ち取った武将の名を先に述べ
てから「猪俣小平六則綱が」と自身の名を告げるとい
うものである。

この一文は、「越中前司最期」の章段を締めくくる最
後の一文である。したがって則綱の勝名のりは、盛俊と
の戦鬪を収束させるとともに、その章段をも収束させる
はたらきをも持つといえる。

為久は義仲を、忠純は忠度を討ち取ったときに名のり。

13 (為久) 太刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、

大音声をあげて、「この日来日本国に聞えさせ給つ
る木曾殿を、三浦の石田次郎為久がうち奉たるぞ
や」となのりければ、(巻九「木曾最期」一八一頁)

14 (忠純) 太刀のさきにつらぬき、たかくさしあげ、

大音声をあげて、「此日来平家の御方にきこえさせ

給ひつる薩摩守殿をば、岡辺六野太忠純がうちたて
まツたるぞや」と名のりければ、

(巻九「忠度最期」二二七頁)

その表現は、則綱の名のりと類型性が認められる。すな
わち、名のり直前の「太刀のさきにつらぬき、たかくさ
しあげ、大音声をあげて」という句が一字も違わぬ同文
で、討ち取った敵将の名を先に告げ、その後自身の名
を述べる順序も同じである。さらに敵将の名には、「此
日来鬼神と聞えつる」「この日来日本国に聞えさせ給つ
る」「此日来平家の御方にきこえさせ給ひつる」が付さ
れ、盛俊・義仲・忠度が名の知れた兵であることを強調
する点も共通している。

(4) 先陣の名のり

軍勢の最前線に立った者が行う先陣の名のりは、八例
が認められる。これは勝名のりと同様に、自らの武功を
主張する名のりである。

15 (義経〈装束描写〉) 大音声をあげて、「一院の御使、

検非違使五位尉源義経」となる。

(巻十一「嗣信最期」三二一～二頁)

16 (高直盛直) 大音声をあげて、「武蔵国住人、河原太

郎私〔市〕高直、同次郎盛直、源氏の大手生田森の先陣ぞや」とぞなのッたる。

（巻九「二度之懸」二〇六頁）

表現としては、高直盛直のように住国と名を述べた後「の先陣ぞや」と言つて先陣を主張するのが典型だが、義経のようにそれがない例もある。

合戦場面の中では、開戦を告げるはたらきをする。たとえば義経は屋島合戦で、河原兄弟は生田森搦手で、真つ先を駆けて先陣を主張することで合戦の火蓋をきる。

宣戦布告の名のりが個人の戦闘の契機であるのに対し、先陣の名のりは屋島合戦や一谷合戦といった合戦譚の契機である。また先陣の名のりは、先陣を遂げたことを主張することに力点があり、名のつた人物の戦闘が直後に続かない点でも宣戦布告の名のりと異なる。

次の忠綱・高綱・重親の三人は、渡河を遂げた場面での名のりである。忠綱は、宇治川を渡すことによつて橋合戦における平家反撃の契機をつくる。高綱の名のりも「粟津のいくさ」へとつながる義仲との合戦の始まりを告げるものである。

17（忠綱）〔装束描写〕あぶみふんぱりたちあがり、大音声あげてなのりけるは、「とをくは音にもき、

ちかくは目にもみ給へ。昔朝敵将門をほろぼし、勸賞かうぶツし俵藤太秀郷に十代、足利太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳。…三位入道殿の御かたに、われとおもはん人々はよりあへや、げんざんせん」とて、平等院の門のうちへ、せめ入くた、かいけり。

（巻四「宮御最期」三二三―四頁）

18（高綱）あぶみふんぱりたちあがり、大音声をあげて名のりけるは、「宇多天皇より九代の後胤、佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治河の先陣ぞや。われとおもはん人々は高綱にくめや」とて、おめいてかく。

（巻九「宇治川先陣」一七〇頁）

19（重親）なげあげられ、たゞなをツて、「武蔵国の住人、大串次郎重親、宇治河〔かちたち〕の先陣ぞや」とぞ名のッたる。

（巻九「宇治川先陣」一七一頁）

先陣の名のりは、連続して行うことによつて、激しい先陣争いを描くものもある。たとえば一谷合戦は、直実・直家・季重の名のりによつて開戦する。

20（直実直家）大音声をあげて、「武蔵国住人、熊谷次郎直実、子息小次郎直家、一谷先陣ぞや」とぞ名のッたる。

（巻九「一二之懸」二〇一頁）

21 (季重)〈装束描写〉「保元・平治両度の合戦に先が

けたりし武蔵国住人、平山武者所季重」となのッて、旗さしと二騎馬のはなをならべておめいてかく。

(巻九「一二之懸」二〇三頁)

22 (直家) 子息の小次郎直家も、「生年十六歳」とな

のッて、かいだてのきはに馬の鼻をつかする程に、責寄てた、かいけるが、

(巻九「一二之懸」二〇三頁)

なお、直家の名のりの発話部は、「生年十六歳」のみである。これは、直前に二度、熊谷直実が子息直家の名を告げているため、「武蔵国住人熊谷直家、生年十六歳」とあるべきところを省略した例と理解しておく。

ここまで、覚一本の動詞「なるる(名乗)」「なのりまうす(名乗申)」を伴う発言二二例を状況の違いによつて四つに分類し、その表現と合戦場面におけるはたらきについて考察してきた。明らかにしたことを二点記す。

まず、その表現に類型性が認められた。たとえば発言部の直前にある「大音声(を)あげて」の句は、一騎打ちの名のり五例を除く一七例のうち、一三例に用いられていた。発言部でも、勝名のりの三例をみれば表現が整えられていることが端的に認められる。他にも一騎打ち

では簡潔な表現であり、宣戦布告や先陣の名のりでは呼びかけを行った後に自身の名を告げ、敵を挑発するという順序が守られていた。

類型に貫かれているのは、表現のみではない。たとえば一騎打ちの名のりでは、敵から名を問われそれに簡潔に応じるといふ、状況としての類型がみられた。宣戦布告の名のりは戦闘の契機となり、勝名のりが戦闘を収束させ、また先陣の名のりは合戦譚のはじめに位置して開戦を告げる。このように、名のりがどのような状況で行われ、合戦の中でどのようなはたらきをするのかという点までもが整えられていることを確認した。

二、延慶本と屋代本の名のり

本章では、前章で検討した二二例について、延慶本と屋代本との比較を行う。二二例中、屋代本では行重をのぞく二一例、延慶本では仲頼・高直盛直・行重・重綱・為久・忠純の六例をのぞく一六例の名のりが確認された。

これらを表にすると、次のようになる。その人物の戦闘描写はあるが名のりが行われない場合は「×」、合戦描写がない場合は「×(欠)」で示した。名のりが記される場合は、発言に用いられる動詞を書き加えた。動詞

が複数回用いられる場合は併記し、対応する動詞が省略される場合は「―」で示した。

(1) 宣戦布告の名のり			覚一本	延慶本	屋代本
1	明秀	名乗	申・申	名乗・云	
2	義仲	名乗	名乗		
3	仲頼	名乗	×	名乗・云	
4	景時	名乗	云		
5	兼平	名乗			
6	光弘	名乗	申・云		
(2) 一騎打ちの名のり					
7	直実	名乗申	申・申	申	
8	行重	名乗	×	×	(欠)
9	重綱	名乗	×	×	(欠)
10	光盛	名乗	名乗掛	名乗	
11	則綱	名乗	申	名乗	
(3) 勝名のり					
12	則綱	名乗		申	
13	為久	名乗	×	名乗	
	覚一本		延慶本	屋代本	

14	忠純	名乗	×	名乗
(4) 先陣の名のり				
15	義経	名乗	名乗掛	名乗
16	高直盛直	名乗	×	名乗・名乗
17	忠綱	名乗	申	名乗・云
18	高綱	名乗	名乗	名乗
19	重親	名乗	名乗	名乗
20	直実直家	名乗	申	名乗・名乗
21	季重	名乗	名乗	名乗
22	直家	名乗		名乗

この表から、動詞「なめる(名乗)」を伴わない例が、延慶本で一〇例、屋代本で六例あることがわかる。また動詞を省略したり重複させる例も、延慶本で五例、屋代本で八例みえる。三諸本がともに「なめる(名乗)」のみを用いるのは、先陣の名のりの高綱・重親・季重のわずか三例である。このことから、覚一本が動詞の一つにまで行き届いた緻密な表現を目指したことが認められよう。

延慶本・屋代本の名のりの引用番号は、前章で掲げた覚一本の番号と同じものを使用する。

(1) 宣戦布告の名のり

はじめに、宣戦布告の名のりをみる。覚一本が好んで描く戦闘は、「大音声」で名のりをあげた人物が大勢の敵に囲まれ、それを打ち破っていく戦闘であつた。

まずは明秀の例を挙げる。

1 (延・明俊) (装束描写) 橋ノ上ニ立上テ申ケルハ、

「モノ其者ニ候ハネドモ、宮ノ御方ニ筒井ノ浄妙明俊トテ、園城寺ニハ其隠レナシ。…」トゾ申ケル。

…太刀ヲ拔テ、九騎切臥テ、十騎ニ当ル度、打ド打折、河ニ捨ツ。 (二中十八、三七四頁)

1 (屋・明秀) (装束描写) 大音拳テ名乗ケルハ「…堂衆ニ、筒井浄妙坊明秀トテ、一人当千ノ兵ゾヤ。

…」ト云俣ニ、…其後、太刀ヲ拔ヒテ切ケルカ、三人切伏、四人ニ当ル度ニ、アマリ二甲ノ鉢ニ強ウ打アテ、目貫ノ本ヨリチャウドラレ、河ヘザブト入ル。

(巻四「橋合戦」二七七頁)

表現について、まず動詞をみると、延慶本では発言の前に「申」とあり、かつ発言の後にも「申」とある。屋代本でも、「名乗」と「云」が重複して用いられている。

次に、発言部の直前、覚一本で「大音声(を)あげて」とあつた一句が、延慶本では「橋ノ上ニ立上テ」とある。

驚くべきことに、延慶本では名のりの場面に「大音声」の語が用いられることは一度もない。屋代本の場合も、「大音声」は景時・兼平・直実直家の三例のみで、「大音」を伴う例も明秀と義仲の二例に限られる。

太刀を抜いて戦う場面、覚一本では「くもで・かくなは・十文字、とんばうかへり・水車、八方すかさずきツたりけり」と描かれていた。しかし延慶本と屋代本では点線部のように太刀を抜いて戦うものの、その類型表現のみが欠けている。そのため大勢の敵に立ち向かう乱戦が、覚一本ほどにはイメージされにくい。

延慶本と屋代本の場合、明秀のみならず仲頼・景時の戦闘にもこうした類型表現がみられない。たとえば景時の場合は、次のようである。

4 (延・景時) 「相模国住人、鎌倉権五郎景政ガ末葉、

梶原平三景時、一人当千ノ者ゾヤ。誰カ面ヲ向ベキ」ト云テ、ヲメイテ係入タリケレバ、名乗ニヲソレテ、城中者共、サツト引テノキニケリ。

(五本二十、下二五一頁)

4 (屋・景時) 「…鎌倉権五郎景政ガ末葉、梶原平三景時。一人当千ノ兵トハ、知スヤ」トテ、ヲメイテ懸入。敵モ是ヲ聞テ中ヲサツトアケテソ、通シケル。

延慶本と屋代本ともに、景時の名のりに「ヲソレテ」敵が引き退いており、戦闘は回避される。名のりを聞いて敵が臆する場面は、延慶本の兼平が名のりつた後にもみえる。

5（延・兼平）今井ハ歩セイデ、敵ニ打向テ、「聞ケム物ヲ今ハミヨ。木曾殿ニハ乳母子、信乃国住人木曾仲三権守兼遠ガ四男、今井四郎中原兼平、年ハ三十二。サル者有トハ鎌倉殿モ知食タルラムゾ。打取テ見参ニ入レヤ、人共」トテ、ヲメイテ中ヘゾ係入リケル。聞エル大力ノ甲ノ物、強弓精兵ナリケレバ、敵憶シテサト引デゾノキニケル。

（五本 九、二二九頁）

こうした例から、延慶本・屋代本では、宣戦布告の名のりをあげることが必ずしも戦闘の契機にならないことが確認できる。

（2）一騎討ちの名のり

次に、一騎討ちの名のりを確認する。まずは延慶本から直実の例をあげる。

7（延・直実）直実又申ケルハ、「君ヲ雜人ノ中ニ置進

候ワム事ノイタワシサニ、御名ヲ備ニ承テ、必ズ御孝養申ベシ。其故ハ兵衛佐殿ノ仰ニ、『能敵打テ進タラム者ニハ、千町ノ御恩有ベシ』ト候キ。彼所領即君ヨリ給タリト存ジ候ベシ。是ハ武藏国住人、熊谷二郎直実ト申者ニテ候」ト申ケレバ、

（五本 廿五、二二六頁）

寛一本では、敦盛からの問いかけに応じて名のりつていたが、延慶本では孝養を行うから名を明かすよう言葉をかけた後、自ら名を明かす。

光盛と則綱も、直実同様に相手の問いかけなしに自ら名のりかける。

10（延・光盛）実盛ガカクルヲミテ、「タソヤ。只一人残留テ戦コソ心ニケレ。ナノレヤ」。カウ申ハ誰トカ思フ。信乃国諏方郡住人、手塚太郎金判光盛ト云者ゾ。吉敵ゾヤ」ト、ナノリカケタリ。

（三本 十三、四〇頁）

11（延・則綱）「我名乗ツルヲバ聞給ツルカ」ト問ケレバ、「ヨクモ不知」ト答。「サラバ名乗テ聞セ奉ラム」ト云。「我ハ武藏国住人猪俣近平六則綱トテ、名譽ノ者ニテ、兵衛佐殿マデモ知り給タルゾ。和殿ノ軍ハ落軍ニナレバ、平家ノ打勝給ワム事有難シ。

サレバ則綱ヲ打テ何ガハシ給ベキ。主ノ世ニオワセ
バコソ勸賞勲功ニモ預ラメ。殿原ハ落人ゾ。則綱ヲ
命ヲ生給タラバ、兵衛佐殿ニ申、和殿ノ親キ人共ノ
有ムカギリハ、何十人モアレ、助ケ申サムズルハイ
カニ。…」
(五本 廿一、二五六頁)

発話部の表現は、住国と姓名のみといった簡潔なものではない。たとえば波線部をみると、光盛は「吉敵ゾヤ」と武勇を主張し、則綱は「名譽ノ者ニテ、兵衛佐殿マデモ知り給タルゾ」と名声を誇っている。動詞をみても、則綱は省略、直実は「申」、光盛は「なのりかく」とあり、統一されてはいない。

このように延慶本では一連の会話の中で名を明かししており、覚一本の緊張感ある問答形式とは全く異なったものである。

続いて、屋代本をみる。

7 (屋・直実「汝ハイカナル者ソ」ト問玉フ。「其者ニテハ候ハネ共、武蔵国ノ住人熊谷次郎直実トハ申者ニテ候」ト申セハ (巻九「二谷」五四八〜九頁)

10 (屋・光盛「カウ云和殿ハ誰ソ。先ツ名乗レ」ト云。

「カウ云ハ信濃ノ国住人手塚ノ太郎光盛ソカシ」ト

名乗。(巻七「長井斎藤別当実盛錦直垂事」二三〇頁)

11 (屋・範綱「…ワ君ハ誰ソ、名乗レ聞ン」ト云ケレハ、「武蔵国ノ住人、猪俣近平六範綱ト申者ニテ候。扶サセ玉ヘ。平家既ニ負軍トコソ見ハサセ玉ヒテ候ヘ。若源氏ノ代ニ成テ候ハ、御辺ノ一家親キ人々、何十人モマシマセ。範綱力勲功ノ賞ニ申カヘテ奉ン」ト申ケレハ、
(巻九「鴨超」五三九頁)

三例ともに「名乗レ」「誰ソ」「イカナル者ソ」などと尋ねられて名の点は覚一本と同様である。ただし覚一本のように簡潔な名のりばかりではない。範綱の例は、名を告げた後にも言葉を続けており、名を明かすことを特別に扱わない。

注目すべきは重綱の名のりである。屋代本での重綱は、「真先ニ進出テ」自ら重忠に名のりかける。

9 (屋・重綱) 其後畠山、乗替ニ乗テ打上ル。魚綾ノ直垂ニ緋緘ノ鎧キテ、連銭総ナル馬ニ黄覆輪ノ鞍置テ乗タル敵ノ、真先ニ進出テ「木曾殿ノ家ノ子ニ、長瀬判官代重綱」トコソ名乗ケレ。畠山、「先ツ軍サ神ニ血祭セン」トテ、カケナラヘ、ムスト取テ引落シ、頸拈切テ、木田次郎カ鞍ノ鞍ニ付サセケリ。
(巻九「宇治川」四八七頁)

屋代本での重忠に戦いを挑む重綱の名のりは、宣戦布告

の名のりに分類すべき例であろう。ところが重綱は、名のつた直後にあつてなく討たれており、戦闘も重忠の行動によつてのみ描かれる。この場面の直前には、馬を激流に流されながらも宇治川を渡りきつた重忠の活躍が描かれており、ここで重忠の軍功が描かれるのも自然な成り行きと読める。

このように屋代本の宣戦布告の名のりには、中心人物に名のりかける例もみえる。

(3) 勝名のり

延慶本での為久と忠純は、勝名のりをあげておらず、則綱の一例のみである。

12 (延・則綱) ヤガテ頸ヲカヒ切テ、太刀ノサキニ指貫テ高ク指テ、「聞ユル平家ノ侍、越中前司盛俊ガ頸ゾヤ。正ク則綱討タリ。後ノ証人ニ立給ヘヤ、殿原」トゾ申ケル。彼刀ハ、薩摩国世代ノ住人、浪ノ平五ガ打タリケル、フタシトロト云刀ニ、ツカニハ桑ニ竹ヲ合タリケル刀トゾ聞ヘシ。

(五本 廿一、二五七頁)

発話部の表現をみると、「正ク則綱討タリ。後ノ証人ニ立給ヘヤ、殿原」と手柄の強調が認められる。名のりの

後には、盛俊の頸を貫いた「フタシトロ」という刀について詳述する。この場面に続いて、人見の四郎に盛俊の頸を奪われるが片耳を持つていたために則綱の手柄と認められたという話が長々と記される。延慶本には勝名のりによつて章段を収束させようとする意図はみられない。次に、屋代本をみる。名のり発話部の表現は多様である。

12 (屋・範綱) 盛俊カ頸、太刀ノサキニ貫キ指上テ「頸ハ音ニモギ、今ハ目ニモ見ヨ。武蔵国ノ住人猪俣近平六範綱。平家方ニ聞ユル、越中前司ヲハ此ウコソ討」ト高ラカニ名乗テ、

(巻九「鴨超」五四〇頁)

13 (屋・為久) 太刀ノサキニ貫テ高クサシアケ、今井カ云ツルニ違ハス「日本国ニ聞ヘ玉フ木曾殿ヲ、相模国住人、石田次郎為久カウコソ討奉レ」トテ高ラカニ名乗ケレハ、(巻九「兼平」四九九〜五〇〇頁)
14 (屋・忠純) 其時、「武蔵国ノ住人置部六野太、薩摩守忠度ヲハカウコソ討奉レ」ト名乗ケレハ、

(巻九「二谷」五四二頁)

まず忠純が、自身を「六野太」というのみで実名を告げない点が注目される。発話部では、範綱と忠純が自身の

名を先に述べており、覚一本の順序とは逆である。また範綱は、「頃ハ音ニモキ、今ハ目ニモ見ヨ」と周囲に呼びかけてから手柄を声高に述べる。

延慶本や屋代本に認められる勝名のりの多様な表現は、自身の手柄を強調する傾向をもつものといえる。

(4) 先陣の名のり

最後に先陣の名のりをみる。先学に多くの指摘があるように、先陣の名のりが行われる一谷合戦や屋島合戦は、諸本によつて章段構成が大きく異なる。合戦場面における名のりのはたらきは、合戦譚全体の構成と密接に関わる。そのため、名のりの場面のみを抜き出してそのはたらきを比較することは避け、ここでは表現を論じるにとどめたい。

忠綱の名のりは次のようである。

17 (延・忠綱) 左右ノ鎧踏張り、鎧ヅキセサセ、物具ノ水ゾ下シケル。門外近ク押寄テ申ケルハ、「…東国下野国住人、足利ノ太郎俊綱ガ子ニ、足利又太郎忠綱、生年十七歳、童名王法師丸トハ、源平知食タル事ゾカシ。…」トテ、ザメカヒテゾ係タリケル。

(二中十八、三八〇頁)

17 (屋・忠綱) (装束描写) 鎧踏張築立上テ、鎧ノ水ウチハライ、マツ名乗ケルハ、「朝敵將門ヲ滅シテ、勳賞ニ預、田原藤太秀郷ガ十代、足利ノ太郎利綱カ嫡子、又太郎、年ヲ申セハ生年十八歳。…」ト云イ、

(巻四「頼政最後」二八二頁)

覚一本で、「大音声(を)あげてなのりけるは」とあったところ、延慶本や屋代本では、宇治川渡河直後にふさわしい鎧の水を打ち払う動作が記されている。

他にも河原兄弟の名のりでは兄弟が立ち並んだ様子が記される。高綱の場合でも簀を打ち叩き紅の扇を開くという聴覚と視覚双方に際立った動作が記される。

16 (屋・高直盛直) 河原太郎ヲト、イ、立並テ名乗ケルハ「武蔵国ノ住人ニ、私ノ党私市ノ高直同次郎守直。源氏ノ大手ノ先陣ソヤ」トソ名乗ケル。

(巻九「梶原二度之懸」五三二頁)

18 (延・高綱) 簀ノホウ(ダ)テ打タ、キ、紅ノ扇ヒラキ仕テ、「音ニモ聞ラム、目ニモミヨ。佐々木ノ四郎高綱、宇治河先陣渡シタリヤ」トゾ名乗ケル。

(五本七、二〇六頁)

表現が多様である点は、先に述べた延慶本の「橋ノ上ニ立上テ申ケルハ」(明秀)や「歩セイデ、敵ニ打向テ」

(兼平)などの例からも指摘でき、延慶本や屋代本にはその状況に関連した多様な表現が認められる。

対して覚一本では、動詞「なめる(名乗)」の用法や「大音声」という語を繰り返し用いる点から、整った表現に徹する様が見てとれる。

三、覚一本の名のりの定義

ここで「名のりとはどのような行為か」という最初の問いに立ち返る。本稿で検討した二二例から、名のりの条件として二点を取り出すことができる。

まずは、敵に対して行うという点である。宣戦布告の名のりがその典型であるように、名のりとは敵方に対して行う行為である。そこには戦闘が起こりうる、一触即発の緊張感を伴う。もちろん勝名のりや先陣の名のりには、味方に対して軍功を主張する一面もある。ただし自軍で味方にのみ聞かせるような例がないことから、敵と味方の双方に向けた名のりと理解できる。

次に、自分の実名(あるいは法名)を告げる点が見られる。別稿で指摘したように、覚一本の名詞「なめる(名乗)」は「武士の実名」の意味で用いられている。²⁹⁾

この実名を相手に告げ知らせるという行為が、(名のり)

という動作の基本的な意味といえる。屋代本では、14忠純の「六野太」や17忠綱の「又太郎」という例のように、実名を告げない場合も認められた。覚一本にはこうした例はなく、全ての名のりで実名を告げる。³⁰⁾

この二点から覚一本の名のりとは「合戦場面で敵に自分の実名(あるいは法名)を告げる行為」と定めることができる。

この条件から問題になるのは、次の義盛の発言である。西本氏と武田氏は名のりと認めたが、どうであろうか。

・越中次郎兵衛盛嗣、：「：けふの源氏の大將軍は誰人でおはしますぞ」。伊勢の三郎義盛あゆませいでて申けるは、「こともおろかや、清和天皇十代の御末、鎌倉殿の御弟、九郎大夫判官殿ぞかし」。

(卷十一「嗣信最期」三三三頁)

この場面で義盛は、盛嗣からの挑発を受けて「源氏の大將軍」が「九郎大夫判官」であることを告げる。義経本人の発言でないことと、盛嗣が主の実名「義経」を口にしていない点が問題である。こうした代理の発言は、名のりとはいえないと考える。

この定義から覚一本の名のりを見返すと、22直家の「生年十六歳」という発言は、発話部で自身の実名を告

げないために除く必要がある。そして、動詞「なのる（名乗）」を伴わないが、条件を満たす例があと七例ある。

①（信連）長兵衛尉これをきいて、「物もおぼえぬ官人共が申様かな。馬に乗ながら門のうちへまいるだにも奇怪なるに、下部共まいってさがしまいらせよとは、いかで申ぞ。左兵衛尉長谷部信連が候ぞ。ちかうよってあやまちすな」とぞ申ける。

（巻四「信連」二八七頁）

②（通信）大音声をあげて、「河野四郎越智通信、生年廿一、かうこそいくさをばすれ。われとおもはん人々はとゞめよや」とて、郎等をかたにひツかけ、

（巻九「六ヶ度軍」一八八頁）

③（直実直家）大音声をあげて、「以前になのツつる武藏国（の）住人、熊谷次郎直実、子息小次郎直家、一の谷の先陣ぞや、われとおもはん平家のさぶらひどもは直実におちあへや、おちあへ」とぞの、しツたる。

（巻九「一二之懸」二〇二頁）

④（直実）大音声をあげて、「こぞの冬の比鎌倉をいでしより、命をば兵衛佐殿にたてまつり、かばねをば一谷でさらさんとおもひきつたる直実ぞや。『室

山・水嶋二ヶ度の合戦に高名したり』とななる越中次郎兵衛はないか、上総五郎兵衛、悪七兵衛はないか、能登殿はましまさぬか。高名も敵によってこそすれ。人ごとにあふてはえせじものを。直実におちあへやおちあへ」との、しツたり。

（巻九「一二之懸」二〇三～四頁）

⑤（盛俊）げにもと思ひけん、「是はもと平家の一門たりしが、身不肖なるによって当時は侍になつたる越中前司盛俊といふ者也。わ君はなにものぞ、なのれ、きかう」といひければ、

（巻九「越中前司最期」二二三～四頁）

⑥（景清）大音声をあげて、「日ごろは音にもき、つらん、いまは目にも見給へ。是こそ京わらんべのよぶなる上総の悪七兵衛景清よ」となりの捨てぞかへりける。

（巻十一「弓流」三二二頁）

⑦（教経）大音声をあげて、「われとおもはん物どもは、よって教経に組でいけどりにせよ。鎌倉へくだつて、頼朝にあふて、物ひと詞いはんとおもふぞ。よれやよれ」との給へども、

（巻十一「能登殿最期」三四一頁）

用いられている動詞をみると、信連は「まうす（申）」、

直実直家と直実は「ののしる(匄)」、盛俊は「いふ(言)」、景清は「なのりすつ(名乗棄)」、教経は「のたまう(宣)」とあり、通信は省略されている。

おわりに

本稿では覚一本の動詞「なのる(名乗)」を伴う発言二二例の表現と合戦場面でのほたらしきについて、延慶本と屋代本の比較から検討した。その結果として、重複や省略をせずに動詞「なのる(名乗)」を用いる点や「大音声(を)あげて」という句を繰り返し用いる点、発話部の順序を守る点から、覚一本の表現が緻密に整えられていることが認められた。

類型によって貫かれているのは、表現にとどまらない。一騎打ちの名のりでは、敵からの要求に応じて簡潔に名のりという、状況としての類型が認められた。同様に、宣戦布告の名のりは戦闘の契機となり、勝名のりは戦闘を収束させ、先陣の名のりは合戦譚の火蓋を切った。つまり、表現が類型であるために名のりが際立った場面となり、際立った場面であるからこそ場面を区切るほたらしきをも果たし得ていたのである。

対して延慶本や屋代本では、覚一本が「大音声をあげ

て名のりけるは」と整えた部分を、「門外近ク押寄テ申ケルハ」や「ヲト、イ、立並テ名乗ケルハ」というようにその状況に応じた表現で描く。名のりが行われる状況をもて、宣戦布告の名のりの後に敵が引き退いたり一方的に討たれたりする場面があり、また勝名のりによって章段が収束しない場合があるなど、様々であった。

かつて宮坂和江氏は、『平家物語』が和歌や今様を『「やさしく優なる」内容的価値の結晶として特別に扱うために、前後の地の文には、受容者の注意を喚起するような指示形式を用いる』ことを述べた。その一例として、読み本は「雑多な形式を混用しているが、語り本では比較的整理されて」おり、「一首の歌をぞ―連体形」を好んで和歌の前に置くことを指摘している⁽³¹⁾。

宮坂氏の論を受けて名のりの類型表現の意義を考えると、名のりの直前に「大音声(を)」あげて名のりけるは」という句を繰り返し置くことも、受容者の注意を喚起するためと考えられる。表現のみならず状況までもが定まっていること、すなわち、装束描写・名のり・戦闘と決められた順序で合戦場面を構成してゆくことは、緊迫した空気を作り出す。これは、これからの展開が予想できないために引き起こされる、手に汗握るような緊張

感ではない。これから起こりうることを既に知っているからこそ高まる、固唾をのむような緊迫感である。

覚一本は、類型表現をただ漫然と繰返しているのではない。緊迫感に満ちた、〈実体感〉を伴う合戦場面を描き出す方法として、類型表現を配置しているのである。

こうした合戦像は、延慶本のような混沌とした合戦譚からよりふさわしい表現を峻別し、それを緊密に配置することによってようやく、しかし鮮やかに浮かび上がる。

覚一本は、類型表現を繰り返しなぞることによって幾度も合戦を追体験させ、物語を聞く者にも読む者にも、鮮やかな〈実体感〉を伴った合戦像を想起させる方法を獲得したといえる。

覚一本の動詞「なる(名乗)」を伴う二一例の表現と状況は、緻密に整えられたものであった。これは物語の中でどのような意義を持つのであろうか。その反面、動詞「なる(名乗)」を伴わない七例は、表現の統制がゆるやかである。こうした名のりは、何を意味するのか。こうした問題について、引き続き論ずることにしたい。

註

(1) 拙稿「『保元物語』の合戦場面における源為朝・源義朝の描出法―半井本と金刀比羅宮蔵本との比較から―」『同志国文学』八四、二〇一六年三月。

(2) 高木市之助ほか校注『日本古典文学大系 平家物語』岩波書店、一九五九年―一九六〇年。以下、覚一本の本文はこれに拠るが、表記を改めたところがある。延慶本・屋代本・斯道本についても、引用にあたって表記を改めたところがある。

(3) 渥美かをる「平家物語における文芸的造型」『平家物語の基礎的研究』三省堂、一九六二年。本書において渥美氏は、平家物語の合戦の基本的な描写型は「筋書型」「集団型」「一騎打型」「英雄型」の四種であると指摘された。

(4) 加美宏「合戦記と合戦譚」『国文学 解釈と鑑賞』三二・一三、一九六七年二月。

(5) 大井善壽「『平家物語』の「語り」と「読み」―口承と書承の概念規定から―」『軍記と語り物』一一、一九七四年一〇月。

(6) 大井善壽「『平家物語』の成立基盤―その書承的側面―」『平家物語の成立』有精堂出版、一九九三年一月。

(7) 千明守「『平家物語』語り系諸本における本文変化と〈語り〉」『平家物語と語り』三弥井書店、一九九二年。

(8) ここでの「語り」は、松尾葦江氏が整理されたところの「芸能として」「伝承として」「文学的方法として」のうち「芸能として」の語りである(「語りとは何か―軍

記物語研究における「語り」の意味——『日本文学史を讀む』三、有精堂出版、一九九二年。

- (9) この部分、志立正知氏の論考からの引用。志立氏は「従来の研究において「語り」として論じられるケース」を、「(1) 音声によるパフォーマンス(上演)」としての「語り」と「(2) テキストの表現方法としての「語り」」に区分された。その上で「従来「語り」によって説明されてきた様々な問題についても、「語り」という位相と、その「語り」を方法として「書く」という位相の両面」から検討する必要性を論じておられる(「表現主体の設定と「語り」をめぐる試論——屋代本と覚一本の比較を通して——」『平家物語と語り』三弥井書店、一九九二年)。

- (10) 小林美和「語り本の類型表現——合戦叙述をめぐって——」『国文学 解釈と教材の研究』四〇・五、一九九五年四月。

- (11) 繰り返しの表現や類型表現を論じたものに限っていえば、たとえば村上學氏と佐倉由泰氏の論考がある。村上氏は、同文の繰り返しに着目し、初期語り本である屋代本や百二十句本が oral tradition に基づく表現構造であるのに対し、覚一本が「口頭表現を擬似した文章語」つまり「疑似語り文体」であると理解された(「語り本『平家物語』の統辞法の一面——幸若舞曲『浄瑠璃物語』の表現法を足掛りにして——」『中世文学』三五、一九九〇年六月)。「平家物語」の「語り」性についての覚え書『平家物語 説話と語り』有精堂出版、一九九四年)。

また佐倉氏は、軍記物の合戦表現の特質として「反復」「省略」「擬音」を挙げ、覚一本の表現が様式化されていることを確認し、表現論に「軍語り」の概念を取り込んで解釈する試みをされた(「軍語りの世界——「記」に対する「話」として——」『国文学 解釈と教材の研究』四〇・五、一九九五年四月)。

- (12) 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇』勉誠社、一九九〇年。以下、延慶本の本文はこれに拠る。

- (13) 麻原美子・春田宣・松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語』新典社、一九九〇—一九九三年。ただし屋代本の欠卷(四・九)を斯道本文庫百二十句本によって補ったために、引用の多くは斯道本に拠らざるを得なかった。(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『平家物語百二十句本』汲古書院、一九七〇年)

- (14) 多くの諸本が伝わる中から延慶本と屋代本を選択するのは、次のような理由からである。延慶本は現在伝わる諸本のうち最も古い姿を残し、覚一本の素材源となったと想定できる諸本である。また屋代本は灌頂巻を特立しない「平家断絶型」である点で覚一本と異なり、かつ覚一本と並び古い本文を伝える諸本である。こうした延慶本・屋代本との比較を行うことで、覚一本がどのように記事を取捨選択し、表現を整えたのかを明らかにすることができると考える。

- (15) 島田康行「『平家物語』の装束描写に関する一考察——「能登殿最期」における教経の場合を中心に——」『人文科教育研究』一八、一九九一年七月。

- (16) 服部幸造『平家物語』から幸若舞曲へ―武装表現から―『語り物文学叢説』三弥井書店、二〇〇一年。
- (17) 阪口玄章『軍記物語の名乗』『中世国文学の研究』楽園書房、一九三四年。
- (18) 加美宏『平家物語―その合戦記にみる―』『国文学解釈と鑑賞』三七・一三、一九七二年一月。
- (19) 梶原正昭『解説―いくさ物語の形象とパターン』『新日本古典文学大系』下、岩波書店、一九九三年。梶原正昭『平家物語合戦用語・表現辞典』『国文学解釈と教材の研究』学灯社、四〇・五、一九九五年四月。
- (20) 注(18)に同じ。
- (21) 西本祐子『軍記物における〈なのり〉の考察』『大谷女子大国文』一二、一九八二年三月。
- (22) 武田昌憲『名のり』の分類―覚一本『平家物語』の場合』『英女国文』創刊号、一九八九年六月。
- (23) 拙稿「ことばからみた覚一本『平家物語』―動詞「なのる(名乗)」の意味―」『文化学年報』六六、二〇一七年三月。
- (24) 注(22)に同じ。
- (25) このことに関しては梶原正昭氏による指摘がある。注(19)「解説―いくさ物語の形象とパターン」において、名のりの形式を、(1)「相手の注意を引く、呼びかけのことば」(2)「自分の身分・系譜・氏名・年齢・軍功などをあげる自己紹介のことば」(3)「相手に勝負を挑む挑戦のことば」と整理された。
- (26) この句に関しては、大下和歌子氏の論考がある(「合

戦場面の常套句「くもで」「かくなわ」「十文字」「とんぼ返り」「水車」について―『平家物語』を中心に―『甲南国文』四五、一九九八年三月。また、「十文字」の語に関しては、早川厚一氏の論考がある(「十文字」考―合戦用語の検証―『名古屋学院大学論集(人文・自然)』三九・二、二〇〇三年一月)。

(27) 注(2)の頭注(一五八頁)。

(28) 小林美和「いくさ語りの変容―『平家物語』の二つの断面―」『伝承の古層』桜楓社、一九九一年。〈再録〉『平家物語』における二つの〈歴史〉』『語りの中世文芸』和泉書院、一九九四年。小林氏は本論文中で、覚一本の類型表現は「戦闘場面のイメージを喚起するための記号的意味を担って」おり、「そのイメージのなかにおいて語りは完結を見る」と述べておられる。本稿は、右論文や前掲論文(注(10))から大いに学恩をうけている。

(29) 注(23)に同じ。

(30) ただし、明秀の名のりのみ、法名である。

(31) 宮坂和江「平家物語り本の詞章について―一方流を中心―」『国語と国文学』三五・三、一九五八年三月。

〔付記〕 本稿は、関西軍記物語研究会 第八二回(二〇一四年一二月)における口頭発表「覚一本『平家物語』「名のり」考―延慶本との比較から―」をもとに、大幅な加筆と修正をほどこしたものです。研究発表内外でご指導やご教示を賜りました方々に、心より御礼を申し上げます。(同志社大学大学院博士後期課程)